

第 25 回 福祉工学カフェ 開催報告

国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)及び国立障害者リハビリテーションセンター研究所は、2020年12月14日(月)に第25回福祉工学カフェを開催いたしました。

福祉工学カフェは、障害のある方の就労、余暇活動を含む様々な生活場면을支援する福祉機器の存在が不可欠であるものの、福祉機器が他の一般的な機器よりも効率的な実用化が進まず、なかなか普及しないというジレンマから、福祉機器ユーザーの方々と研究・開発に携わる方々の情報共有の機会を提供するイベントです。

福祉工学カフェを開始して11年目となる2020年度は、新たな試みとして、年度を通じて共通のテーマについて3回に分けて開催することといたしました。今年度のテーマは、ウィズコロナ及びアフターコロナの社会を加味し、主に視覚に障害のある方を対象として「誰もが安全に生活できる“新しい生活様式”のあり方」を取り上げます。第2回目は、第1回目に行った視覚に障害のある方々から伺ったニーズを解決する要素技術から社会実装へ向けての気づきを得ていただくとともに、実用的な機器開発の促進を図ることを目的に開催いたしました。福祉工学カフェとしては初の完全オンライン開催をさせていただきましたが、50余名の方々にご参加いただき、盛況のうちに終えることができました。ご参加いただきました皆様、どうもありがとうございました。

【障害を発症した時期によってコミュニケーション方法に違いがあること】

盲ろうの方向けの支援機器として、指点字の機器を開発された方からのプレゼンテーションがあり、障害当事者の方と支援者の方からろうベース[※]で途中で盲ろうになられた方は、指先による触読で点字を読むことが難しいので、点字が苦手というコメントを頂戴しました。これは、ろうベースの方の場合は、コミュニケーションの手段として手話を利用していらっしゃる方が多いため、ろうベースで盲ろうになられた場合には触手話などが利用されるためです。

実は、視覚に障害のある方の文字情報の処理に関するコミュニケーション方法についても同様のことが言えます。視覚に障害のある全ての方が点字を得意としているわけではありません。コミュニケーション手段として点字を使われるかどうかは、視覚障害を発症された時期に大きく依存します。先天若しくは比較的早くに発症され、盲学校に通われた方の場合は点字を読むことができる方が多いのですが、必ずしも点字が得意というわけではありません。視覚に障害のある方の多くは中途の方で、比較的高齢で発症される方が多いため、点字よりも朗読を好む方が多く、点字を読むことができる視覚に障害のある方は約10%と少ないのです。

※ ろうベースとは、先に聴覚障害を発症された方のことを示します。同様に、盲ベースとは、先に視覚障害を発症された方のことを示します。

【1種類の障害ではなく、類似した課題のある市場を複合させて考えること】

視覚に障害のある方は、情報弱者であるとともに移動弱者でもあります。例えば、移動弱者という視点では、既に広く知られている過疎地での高齢者の移動に関する課題への技術開発と共通する要素技術を用いることができるという示唆をいただきました。このように、共通する課題を持つ市場と複合させて考えることで、視覚に障害のある方だけだと小さな市場規模であったために、なかなか量産効果が上がらず、事業化が難しいと思われる場合であっても、複合させて考えていただくことで大きな市場をターゲットにできるため、量産効果が上がって、企業と障害当事者の方が Win-Win の関係になれるのではないかと示唆をいただきました。

【デザインで障害のある人とない人との隔たりを少なくすること】

障害当事者の方から「デザインで障害のある人と障害のない人との隔たりを少なくする福祉用具になると良いのではないか。」というコメントを頂戴しました。ウェアラブルで装着しているコミュニケーション支援の福祉機器が可愛いデザインであったり、移動を支援するロボットがクールなデザインであったりすることで、障害のある方に障害のない周囲の方が気軽にコミュニケーションができるようになると、すごく良いのではないかとコメントです。福祉用具や福祉機器をポジティブに楽しみながら使用することができるようになると、社会がポジティブな方向に回るのではないかとご提案を頂戴しました。

最後に、視覚障害の有無にかかわらず無人駅でロボットによる支援が欲しい、視覚に障害のある方が駅のホームを移動する際の安全性向上や、街中・テーマパーク等をぶらり歩きする際のロボットによる支援が欲しいといったニーズに対応することは技術的には可能ではあるものの、事業として成り立たせるためには様々な課題があるということが明確になりました。